

# 子どもの検査への対応とその評価

～成長・発達と成人との違いをふまえて～

特集にあたって

## 小児の検査施行と その基準値の理解と実践に向けて

これまでの小児医療において、子どもは説明してもわからないし、理解できないため、特に検査や治療の必要性、その内容などを前もって説明することなく、時には無理やり行ってきたという実感がある。すなわち、子どもの意向を考えず、医療従事者側の都合を最優先して子どもへの検査や治療を行ってきたといえよう。

近年、「個人の人権を守る」ということが重要視され、子どもであっても、その年齢に応じて、医療行為に先立ち、「事前に十分な説明を行い、理解をさせて、納得したうえで同意を得る」ことが求められている。このような努力を医療従事者は常に行う時代になったと考えられる。ただし、一般論として、子どもたちに嘘をつかないことが最優先されるべきであるが、子どもの性格によっては事前予告なしに実施するほうが結果的には好まれる場合もある。そういった観点では子どもたちの性格を十分に把握し、その性格をふまえて、保護者と十分に相談をして、検査実施の予告時期や説明の内容を決定するべきである。つまり、その多様性を医療従事者側がしっかり理解して繊細かつ柔軟な対応を行うべきであろう。

侵襲的な検査は健常児には通常行わないため、健常成人の検査を繰り返し、その基準値が決定される成人と異なり、各年齢の健常児の基準値は明確なものはないといってよい。血液検査値などにおいて、その評価は諸外国のデータや小児科医師の経験などにより、臨床現場で行われているのが現状である。さらに、子どもたちは過去のデータもない場合が多いため、子ども

たちに行う各種検査の目的の一つに、その子どもの客観的なデータを作成していくという点があげられる。すなわち、健全な成長・発達のプロセスを残すという意義がある。

子どもの特徴は実際、成長と発達であるが、その速度は個人差が大きく、一時点での評価はきわめて困難であると考えて対応すべきである。このような観点から、子どもの検査は必要最小限であるべきであるが、検査結果を記録していくことが重要であり、その客観的なデータを集めたうえでその子どもの診療を行っていくべきであろう。いずれにせよ、各年齢における、あるいは各個人における検査値の評価は慎重であるべきであり、異常値を単にその数値で即刻評価するのではなく、バイタルサインなどと照らし合わせて、必要であれば再評価(再検査)を考慮すべきである。

本特集では、チャイルド・ライフ・スペシャリスト、障がい児対応の専門家などからも、子どもへの医療的対応の原点を検査という切り口で解説してもらった。検査データの年齢に応じた正確な評価はもちろんであるが、本特集が子どもの検査に対する医療従事者のアプローチを基本に戻って再度考察する契機となり、よりよい医療提供が子どもたちにもたらされることを願っている。

北九州市立八幡病院・小児救急センター病院長  
市川光太郎 Ichikawa Kotaro